

2023年7月9日 久宝教会 部落解放祈りの日礼拝メッセージ

「いっしょに汚れる」

水谷憲牧師

聖書 ルカによる福音書 7章 11-17節

今回の聖書は「やもめの息子を生き返らせる」と題された話です。「やもめ」というのは、夫を亡くした女性や妻を亡くした男性を指す言葉で、この話では、夫を亡くしてやもめとなっていた女性の息子をイエス様が生き返らせた、という話です。この話、いわゆる「ナインのやもめ」とも呼ばれるこの話は、ある神学者によると全福音書を通して一番美しい物語であると言われるほど、有名な話でもあります。ガリラヤ地方の南部、イエス・キリストの故郷であるナザレから山を越えて10キロ、ガリラヤ湖から見ると南西に当たる地点にナインという町があります。イエス・キリストがまだガリラヤ地方を中心に宣教をしておられた頃、そのナインの町に一度だけ行かれたことがありました。その時の話です。

イエス一行がもうすぐナインの町に入る、ナインの町の門が見えてきた頃です。彼らは町の方からある一つの行列が出てくるのを見ました。町の誰かが死んだのでしょう。それは葬送の行列でした。聖書には「ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばにつき添っていた」と書いてあります。なんでこの行列が、やもめの息子の吊いだと分かったのでしょうか。もちろんすれ違いざまに行列の人々から息子を失って悲しみにくれているやもめの話を聞いたのかも知れません。あるいは、葬送行列の先頭に男性ではなく女性が立っていたので、分かったのかもしれない。普通、葬送行列の先頭には男性が喪主として立つことが慣わしになっていましたから、先頭に女性が立っていたということは、既に夫はいなかったということになります。さらに、棺とは言っても私たちの想像する棺桶とは違い、この地方の棺はふたのないものであったか、あるいはもっと簡素な担架のようなものであったともいいますから、亡くなったのが年配の男性ではなく若い男性、つまり息子であろうことも、見れば分かったのかもしれない。このように、若い男性の棺を担いで行進する葬送行列、その先頭には泣き崩れる女性がいたことから、ああこれはやもめの女性が一人息子を亡くしたのだろう、とイエスにも見て分かったのでしょうか。

しかし、それにしてもこの母親の悲しみようは察するに余りあります。夫を早くに亡くした彼女にとっては、夫の忘れ形見である一人息子は彼が少年であったにせよ、青年であったにせよ、彼女の深い慰めであり、生きる喜びであり、希望であったに違いない。彼女にとっての生きる支えであったはずのその息子が、病気か事故か分かりませんが、彼女の目の前を去ってしまったのです。子どもというのは、3歳までに一生分の親孝行をするものだと言ったことがあります。それは、3歳までは本当にかわいいかわいいていけるけれども、それから後はどんどん生意気になり、親から離れていってしまうもので、だからあまり欲張らずに子どもは3歳までで一生分の親孝行をしてくれたのだと思って満足しなさい、という半ばあきらめのよ

うな、自分に対する言い聞かせのようなものかとも思うわけです。あるいは、今ほど医療が発達していなかった昔は、子どもが無事に3歳まで育てられるだけで、もうけもの、恵みだったんだというような事情もあるのかもしれません。けれども、ごくごく一般的な親の立場からしてみると、たとえ親孝行でなくともいい、立派な息子でなくともいい、元気で生きていてくれるだけでいいという気持ちもまた、本音としてあるのではないのでしょうか。それが親一人子一人で手を取り合って生きてきたのであればなおさらでしょう。親子でなくともそうです。愛する人を失うということ、それがどれほどつらいことか。もう二度と手を握り合うこともできない、もう二度と名前を呼んでも返事が返ってくることはない、もう二度と名前を呼ばれることもない、眠っているように閉じられたまぶたが再び開いて私を見つめ、私に微笑みかけることももう二度とない。想像しただけで、考えただけで恐ろしいことです。そのような愛する者とのあきらめきれない別れに加え、彼女の場合は別れを惜しむ暇すらなかったのです。暑いパレスチナ地方では、遺体の保存がききませんから、人が亡くなると、その日のうちに埋葬していたようです。ですから、この母親には息子と満足なお別れをする間もなかったことでしょう。そんな彼女はきっと、悲しすぎて、辛すぎて、誰かに脇を支えられなければ一人で立って歩くこともできないほどだったかもしれません。日本のように、悲しみをぐっとこらえる姿が美しいといった文化でもないでしょうから、声を上げて泣いておられたのかもかもしれません。

イエスはそんな母親を見て「憐れに思い」ました。もちろんそれがイエスでなく、私たちであったとしても、そんな悲痛な場面に立ち会って動揺しない人はいないでしょう。しかし私たちは、そのような場面に出くわして母親の悲しみようを見て心を痛めたとしても、何もできずに、ただ見送ることしかできないかもしれません。いや、何もできないでしょう。そんな時に私たちがどんな言葉をかけられるというのか。何かありきたりで気休めにもならんような慰めの言葉を取ってつけたようにかけるくらいなら、むしろ黙ってた方がよほど誠実だ。しかしイエスは、あえてその沈黙を破り、母親に「もう泣かなくともよい」と言われたのです。「憐れに思う」とは「はらわたがちぎれるような思いをする」「内臓が揺さぶられる」といった意味です。イエスはこの悲しみの行列を見て、はらわたがちぎれるような、内臓が揺さぶられるような、居ても立ってもおれない思いに駆られ、行列を通り過ぎるままにしておれず、走って取って返し泣き崩れる母親に「もう泣かなくともよい」と言われたのです。

「もう泣かなくともよい」。これは文法的には否定の命令形でありまして、直訳すると「泣くのをやめなさい」という意味です。私たちがこの言葉を語る時、「これ以上いくら泣いたって仕方がないから、もう泣きなさんな」とか「死んだ子が悲しむから、泣いたらだめだ」といった意味になってしまうことがあるように思うのですが、イエスのこの言葉はそういう意味の「泣くのをやめなさい」ではなかった。イエスは、これ以上泣いても仕方がない、といったあきらめや、悲しくても歯を食いしばって涙をこらえよ、といった忍耐を勧めているのではなかった。彼女の悲しみに激しく

心動かされ、そんな彼女を実際に泣く必要のない者とする約束の言葉として「もう泣かなくともよい、泣くのをやめなさい」と言われたのです。そしてイエスが棺に近寄っていき、手を触れながら「若者よ、起きなさい」と言われると、息子は起き上がりました。ものを言い始めました。「お母さん」と言ったのかもしれませんが。息子は死という闇の世界より引き戻されたのです。イエスの約束どおり、イエスは死から息子を取り返し、母親に返すことで彼女を悲しみの涙を流す必要のない者とされたのです。

このように、イエスはやもめの一人息子をよみがえらせられました。イエス・キリストは後にご自分でも証されたように、死にも打ち勝つ力を与えられた方なのです。ただこの話は「イエスさまは死人を生き返らせることのできる方なのだ」とそんな風に単純化して語られるべき、理解されるべきではない。なぜなら、そこだけを強調してしまうと、それならイエスさまは私たちの愛する人が死んだ時にもよみがえらせてくれるのか、あるいはナインのやもめの息子はよみがえらせられたのに、なぜ私の愛する人をよみがえらせてくれなかったのだ、ということにもなってしまうからです。そうではない。この話はそんな単にイエスさまは死人だって生き返らせることができるんだ、っていう話ではない。イエスがここであえてこのやもめの息子を生き返らせられたのは、それによって生ける屍だったようなナインのやもめを再び生きる喜びと希望の力に満ち満ちてよみがえらせるため、そして、このことを通して「神は私たちを心にかけて下さっている」ことを証するためだったのです。この話は、やもめの息子がよみがえらせられたようであって、実はその母親であるやもめがよみがえらせられた話であったように、私は思うわけです。

それじゃあ、本当に神様が私のことを心にかけて下さっているのなら、私の愛するあの人を生き返らせることで、私のことも生き返らせてください。もちろんそう心から思っておられる方もたくさんおられるでしょう。しかし、私たちのことを気にかけて下さっている神様は、「死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」とキリストも言われておりました(ルカ 20:38)。今この世に生きている私たちが、本当に力と喜びにあふれて命を燃やしつつ歩いてゆくために、神様はいつも最善の答え、最善の道を用意される。そしてそれは、必ずしも私たちの希望に沿うものとは限らない。私たちも薄々分かっているはずです。失った愛する人をよみがえらせることが、2000年前のナインのやもめの場合には、彼女をよみがえらせるためにはたまたま最善であったのかもしれないけれど、現代を生きる私たちの場合にはそれがそのまま最善とは限らない。いやむしろ、最善の道が別にあることの方がほとんどなのではないか。私たちそれぞれの顔かたちが違うように、私たちそれぞれのことを心にかけておられる神様は、私たちがこの世界を喜んで生きるために、それぞれに異なる形で最善の道を用意しておられるのです。キリストに連なる私たちは、ナインのやもめの息子をよみがえらせられたイエスの姿から「神は私たちを心にかけておられる」ことを改めて知り、与えられた生を喜んで歩みたいと思います。

最後になりましたが、本日は「部落解放の祈りの日」礼拝ということで、今も厳然と残っている部落差別のために涙を流している人たちが差別から解放されますように、あらゆる差別がこの世からなくなりますように祈りを重ねましょう、と日本基督教団部落解放センターが呼びかけている日です。特に大阪は日本最大の被差別部落を有する土地です。私の友人がある時、高校時代の話で、やはり自分が被差別部落出身であることがいつばれてしまうだろうかといつもびくびくしていて、あの頃は毎日が怖かったなあ、と淡々と語ってくれたことを思い出します。

差別について語っていると、「そうは言っても、実際あの人らは怖いんでっせ、そんな実態知ってますか」という問いにぶつかる時があります。確かに中にはそういう者もいるかもしれませんが。しかし、それは元をたどれば差別を跳ね返そうというところが原点になっているわけで、右翼ややくざに被差別部落出身者や在日の人が多いというわさが本当だとしても、やはり誰からも馬鹿にされたくない、なめられたくないという思いからそうなのではないでしょうか。しかし少なくとも私が出会ってきた人々や私の友人は、差別の苦しみに悔し涙を流しながらも、暴力に訴えることなく、人として当たり前生きていきたいという願いをもった人々でした。私達も日常の歩みの中で知らず知らずのうちに、もっともな理由をつけて誰かを差別して遠ざけてしまっているかもしれません。

そんな部落差別の特徴的な点は「汚れ」意識かもしれません。科学的には何の汚染もないのに、体が汚れている、血が汚れている、触ってはいけない、近づいてはいけないと忌み嫌って排除してきた長い歴史があります。それは今日の聖書にあった「死」に関する汚れに共通するものもあったかもしれません。しかし、今日の聖書で見たように、私たちの主イエス・キリストは、汚れているとされていた重い皮膚病の人や血を流す女性、そして今日のように死んだ人の棺あるいはその身体にも何の躊躇もなく触れ、汚れも死をも乗り越えられました。「何が汚れているというんだ、そんな汚れなどない、仮にあったとしても、それがどうした」といったものかもしれません。ただそれは、衛生的な問題などどうでもよいという姿勢などではなく、それとはまた別の、人間の値打ちに関わる差別の問題だったからです。実は、最近、本田哲郎神父が訳された聖書の解説を読んでいると初めて知ったのですが、私たち久宝教会とも大いにかかわりのある「コイノニア」という言葉、これは神との交わりを表す言葉なのですが、その本来の意味は「いっしょに汚れる」ということなのだそうです(本田哲郎『小さくされた人々のための福音』15頁)。他の誰が何と思おうと、いっしょに汚れて結構。私は、それほどにあなたを愛しているし、あなたのことを気にかけている。「コイノニア」という言葉には、そんな神の思いが込められていることを思いながら、人を人として当たり前大切にすることを、福祉に携わる者のひとりとしてこれからも大切にしていけたらと思います。